

P.- H. ・ ド ・ ヴァランシエンヌの風景画理論の再検討

京都大学 吉田 朋子

ピエール＝アンリ・ド・ヴァランシエンヌ (1750-1819) は、18 世紀末から 19 世紀初を代表する風景画家の一人である。ブッサン以来の伝統復活をめざし、風景画の地位向上に向けて努力した。1816 年に、ローマ賞・歴史風景画部門が創設されたのは、彼の存在に拠るところが大きい。また、ミシャロンら後進を教育した功績もあり、コローとは直接の接触はないものの、孫弟子にあたる。

彼の作品には、後進性と先駆性が併存している。その完成作は、しばしば無味乾燥に陥りがちであるといわざるをえない。これに対して、下準備として制作されたオイルスケッチ(ルーヴル美術館に多数所蔵)は光に対する鋭敏な感覚を示し、これをもって野外での油彩画制作の先駆者とされることも多い。しかし、ヴァランシエンヌ本人は、オイルスケッチをあくまで手段としてしか認識していなかった。彼の価値観は、18 世紀以前のものとどまっている。

一方、彼の風景画理論もまた、複雑な様相を呈している。著作『芸術家のための実用的遠近法提要、ならびに絵画、特に風景画についての省察と学生への忠告』(初版 1800 年)は、後代まで影響を及ぼすこととなった。カミーユ・ピサロが息子リュシアンにこの書物を薦めたエピソードも想起されるであろう。この書物は題名からも分かるように、前半と後半に二分することができる。また、出版時に二分冊にしようという意図があったという指摘もなされている。前半は遠近法の概説となっている。これに対し、後半では自然に即した研究の重要性と方法が詳しく論じられており、19 世紀風景画の展開を予告する最重要テキストの一つとして注目されてきた。しかし同時に、同時代の他の著作と比べても古めかしい印象を与える部分を内包しているのである。

彼の二重性 — 後進性と先駆性 — は、ヴァランシエンヌ、ひいては 18 世紀末から 19 世紀初に特有の複雑さを象徴するものといえよう。ヴァランシエンヌの理論を改めて丹念に読み解くことによって、その複雑さの一端を明らかにすることは、風景画研究に資するところ大なのではないかと考える。

本発表では、これまであまり取り上げられてこなかったヴァランシエンヌによる前掲書の前半、つまり遠近法解説に注目したい。ヴァランシエンヌは 1812 年から美術学校の遠近法教授をつとめていた。いうまでもなく遠近法は自然の要素を組み合わせて絵画面として再構成する技術であるが、あえてその記述方法を詳細に検討することで、彼の「二重性」の実相をより深く理解することができるのではないだろうか。

まず、先行研究を踏まえつつ、この書を風景画理論の伝統の中に改めて位置づける。さらに、彼の遠近法解説を、アブラハム・ボッスやアンドレア・ボツォといった先行者たちの著作と比較する。このような作業を通して、ヴァランシエンヌの風景画理論をより多くの情報から検討しなおすことを目指す。